

スポーツ国際開発学共同専攻(修士課程)

Joint Master's Program in International Development and Peace through Sport

授与する学位の名称	修士(スポーツ国際開発学) [Master of Arts in International Development and Peace through Sport]	
人材養成目的	スポーツを通じて国内外の社会開発を担う人材、我が国の体育教育の制度と実践を理解し、諸外国に支援ができる人材、そして国際平和と友好、青少年教育を促進する国際機関で活躍できる人材を養成する。	
養成する人材像	筑波大学大学院学則および鹿屋体育大学学則に規定する課程の目的を充足した上で、次の能力などを有することが最終試験において認定された者に修士(スポーツ国際開発学)の学位を授与する。 1. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感 2. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ 3. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力 4. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力	
修了後の進路	国際機関、国内外のスポーツ関連組織、国内外の開発支援組織、大学等の教育研究機関等、国内外 NGO、NPO 機関、国内外グローバル企業等	
ディプロマ・ポリシーに掲げる知識・能力	評価の観点	対応する主な学修
1. 知の活用力: 高度な知識を社会に役立てる能力	① 研究等を通じて知を社会に役立てた(または役立てようとしている)か ② 幅広い知識に基づいて、専門分野以外でも問題を発見することができるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、スポーツ・文化・社会、上級コーチ教育論、プロジェクトマネジメント論、研究方法論、開発学原論、社会開発のための公共政策、課題研究、中間発表会、修士論文作成、修論審査、学会発表など
2. マネジメント能力: 広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	① 大きな課題に対して計画的に対応することができるか ② 複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ・文化・社会、プロジェクトマネジメント論、NGO 等プロジェクト、各種 OJP 科目、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
3. コミュニケーション能力: 専門知識を的確に分かり易く伝える能力	① 研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ② 研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	各種 OJP 科目、中間発表会、修論審査、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
4. チームワーク力: チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	① チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ② 自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	各種 OJP 科目、NGO 等プロジェクト、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
5. 国際性: 国際社会に貢献する意識	① 国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ② 国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、社会開発のための公共政策、留学生との交流、国際会議発表など
6. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感	国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感を身につけているか。	
7. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ	グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	
8. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力	スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力の基盤となる知識を身につけているか。	
9. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力	国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	

学位論文に係る評価の基準	
<p>審査に当たっては、学位論文の提出を受け、主査および副査2名による査読とそれに続く口頭発表・質疑応答(主査副査に限らず公開で質問を受けつける)を行い、主査及び副査が100点満点による評価を行う。60点以上を合格とする。</p> <p><修士論文の審査基準></p> <ol style="list-style-type: none"> 研究テーマの適切性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や学術的・社会的意義が適切に示されている。 研究目的や課題が適切で、明確である。 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 文献研究の適切性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 研究方法の妥当性 <ul style="list-style-type: none"> 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 論理の一貫性 <ul style="list-style-type: none"> 研究論文全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。 研究の独自性・独創性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に独自性や独創性が認められる。 論文構成・体裁の適切性 <ul style="list-style-type: none"> 本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に従って、適切に修士論文が作成されている。 <p><特定課題レポート></p> <ol style="list-style-type: none"> 研究テーマの適切性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や社会的意義が適切に示されている。 研究目的や課題が適切で、明確である。 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 文献研究の適切性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 研究方法の妥当性 <ul style="list-style-type: none"> 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 論理の一貫性 <ul style="list-style-type: none"> レポート全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。 研究の実践性 <ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に現場における実践性が認められる。 レポート構成・体裁の適切性 <ul style="list-style-type: none"> 本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に準じて、適切にレポートが作成されている。 	
カリキュラム・ポリシー	
<p>体育学、国際開発学の2領域における専門的な知識、研究能力とともに、国際開発でリーダーシップを発揮するために必要な、多様性に対する理解など、汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。</p>	
教育課程の編成方針	<p>学位に相応しい専門的能力を身につけるため、以下の専門科目を実施している。また、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、関連科目を設置している。今後は関連に加えて、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目からも2単位を履修することを推奨することでさらなる汎用的知識、能力を涵養する。</p> <p>■講義科目(14単位以上履修)</p> <p>・基礎科目(スポーツ国際開発論Ⅰ、オリンピックムーブメント論、スポーツマネジメント論、スポーツ・文化・社会、ヘルスプロモーション論、上級コーチ教育論、研究方法論など)において、獲得すべき能力の基盤となる知識を身に</p>

	<p>つける。平成31年度より、比較体育科教育論を加えてさらなる充実を図る予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応用科目（スポーツ国際開発論Ⅱ、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論など）において、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につける。 ・関連科目（開発学原論、社会開発のための公共政策、社会開発論、経済開発論など）において、国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力を身につける。 <p>■演習科目（10～12 単位履修）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内科目（課題演習）では、スポーツを通じた開発と平和、スポーツを通じた教育・青少年育成、スポーツとジェンダー・人種・民族、健康と環境、アダプテッドスポーツ・高齢者の5領域を各自の研究テーマに合わせて選択し、獲得すべき能力についての専門的な知識とともに、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 ・学外科目（JSCセミナー、JSCプロジェクト、国外大学セミナー、国際カンファレンス・セミナーなど）では、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 <p>■実践科目（6～8 単位履修）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内OJP（4週間）と国外OJP（16週間）により、獲得すべき能力の実践現場での知識と実践力を身につける。 <p>■キャリアパス形成</p> <p>本専攻は、筑波大学・鹿屋体育大学の両大学の特徴を活かし、かつJSCとの協働によって、講義・演習・実践とが橋渡しされ、キャリアパス形成に直結するような教育課程編成と実施がなされている。JSCが展開している事業に学生が参加する「JSCセミナー」「JSCプロジェクト」のほか、国内OJP（4週間）を実践する機関のひとつにJSCが位置づいており、国外OJP（16週間）実施の際にもJSCの情報やネットワークを活用している。国外OJPは、学生のキャリアパス形成にとって重要であり、協定締結機関である国際協力機構（JICA）の長期ボランティア制度を利用できるほか、国外のNGO、IF、NF、大学等と連携を取って実施している。</p>
学修の方法 ・プロセス	<ul style="list-style-type: none"> ・指導体制は主指導教員1名、副指導教員2名（副指導教員のうち1名は本籍大学以外の教員） ・1年次において、各自の志望領域の課題演習を履修する。 ・1年次後半から2年次にかけて、国外On the Job Practice（16週間）を実践。 ・2年次において、課題研究を履修する。 ・2年次において、中間発表会（10月）、論文（または特定課題レポート）テーマ提出（11月）、論文（または特定課題レポート）提出（1月）、最終試験（1月）を実施する。
学修成果の 評価	<p>達成度評価については、入学時から課程修了まで、学生の履修状況、教授方法、指導体制などの項目で総合的に行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義科目：筆記試験及び口頭試問によって、専門的知識とともにプラクティショナーとしての基礎力を評価する。 ・演習科目：課題演習における専門的知識については、筆記試験や口頭試問によって評価する。学外での実践科目におけるグローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力については、両大学教員とJSC担当者及び協定を締結した現場指導者との協議の上で、学修状況と面接によって評価する。 ・実践科目：国内・国外OJPにおける総合的な能力の評価については、両大学教員とJSC担当者及び協定締結機関の現場指導者との協議の上で、学修状況と面接によって評価する。 ・キャリアパス形成：演習科目（学外）や実践科目の経験をもとに、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力について、両大学教員とJSC担当者及び協定締結機関の現場指導者との協議の上で、学修状況と面接によって評価する。
アドミッション・ポリシー	
求める 人材	<p>スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識を持ち、スポーツに関わる指導経験など実務経験を有し、英語によるコミュニケーション能力及び国際情勢と政策に関する知識を基盤として、国際開発と平和構築に対する使命感、かつ目的達成志向の強い学生を求める。</p>
入学者選抜 方針	<ul style="list-style-type: none"> ・口述試験（合計200点）：スポーツ・体育・健康に関する基礎知識の評価、研究計画のプレゼンテーション、質疑応答（海外在住の受験者に対しては、オンラインで実施） ・英語（TOEICまたはTOEFLまたはIELTSを100点満点に換算）